

『ジンジャーとフレッド』

1985年／イタリア・フランス・西ドイツ／フェデリコ・フェリーニ監督作品

不惑を過ぎて、フェリーニ再発見
心に染み入る最愛の作品に

会員 計良 明芳 (61期)

『ジンジャーとフレッド』
発売元：アイ・ヴィー・シー
価格：3,990円(税込)



次期選挙再選至上主義の正直すぎる議員先生たちが、当落の帰趨を左右する“年金逃げ切り世代”の既得権益は軒並み温存し、全てのシワ寄せを現在50代前半以降の“年金逃げ水世代”に押し付けようと本気で画策しているという、スプラッター映画さながらの恐ろしい報道を見聞きするにつけ、歳をとることと希望を失うことは同義なのだなあと身に染みて思い知らされる今日この頃。

とはいえ、死なない限り歳はとります。そうであれば、せめて歳をとることの良い点をできるだけ多く見つけだし、それらを慈しみながら逃げ水に向かって重い歩みを続けるしかありません。

実際に、「歳をとると、こんな良いことがあるのか」と折に触れて実感することは多々あります。映画をより深く鑑賞できるようになったことも、そのひとつ。

若い頃から映画は好きでよく観ていたのですが、フェデリコ・フェリーニ監督作品は『道』以外は全く理解できず、長いあいだ自分には縁のない監督だと決めていました。

今回ご紹介する『ジンジャーとフレッド』は、昨年DVDで観た作品ですが、どうして縁のないはずのフェリーニ作品を観ようと思ったのか、正直なところよく覚えていません。たぶんイタリア(語)映画だからというのが主たる理由だったと思います。

かつてタップダンスのコンビ“ジンジャーとフレッド”(のそっくりさん)として活躍したアメリカ(ジュリエッタ・マシーナ)とピッポ(マルチェロ・マストロヤンニ)が、テレビ出演のため30年ぶりに再会します。今では

新しい人生のパートナーと幸せな家庭を築いているアメリカに対し、相も変わらぬ根無し草の生活を送っているピッポ。そんな2人が、なんとか無事に演技を終え、再び別れるまでの2日間の物語です。

撮影当時60代半ばのフェリーニが、かつて恋人だったアメリカとピッポの再会と別れを、2人に寄り添うようにしながら暖かい視線で描いてみせます。もしかするとフェリーニは、本作品をとおして自身の老いとも向きあっていたのかもしれません。

年齢相応に大人(?)になったアメリカと、還暦を過ぎても悪ガキのまま成長しないピッポ。3枚目寄りの2枚目半役で真骨頂を発揮するマストロヤンニの、水を得た初老の魚のような演技は必見です。

フェリーニ監督お得意の異形のオンパレードも、以前は必然性がないように思えて苦手だったのですが、テレビという“電波見世物小屋”を舞台にした本作品では、違和感どころか異形の存在が演出上必用欠くべからざる構成要素にまで昇華されています。

全編が心に染み入るような本作品は、『道』を抜いて、私にとって最愛のフェリーニ作品となりました。もしも10代20代の若い頃に観たのであれば、本作品に対する印象は全く違ったものとなっていたはずです。「フェリーニは、やっぱ、あわない」で簡単に片づけられていたことでしょう。

本作品でフェリーニを再発見した私は、これを機に他のフェリーニ作品も観なおすことに決めました。必ずや新たな発見があると信じて。イタリア語の勉強にもなるし。